

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2016年9月 NO.193



[もくじ]

- 2～3 教育としての美術 ～美術に希望をのせて～…佐竹誠
- 4～5 アルテックの四十三年………青山清水
- 6～7 「高知市民の大学」八十期（四十周年）を迎えて…鈴木堯士
- 8～9 ピノキオさんが生まれた国で（第五回）～夏休み、母の宿題～…並河咲耶
- 10～11 「演出家だらけの青木さん家の奥さん」特別インタビュー！
- 12～13 高知市文化振興事業団7月～8月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

教育としての美術

美術に希望をのせて



佐竹 誠

私について

ふとしたことをきっかけにこのような文章を書く機会をいただいた。私は、平成元年に四万十市(旧中村市)で男三兄弟の末っ子として生まれた。大学進学のため、高知を離れた。大学では、油絵と美術教育を学び、主に風景画を描いている。昨年三月に大学院を修了し、高知に帰ってきた。昨年度の二学期に中学校で美術の講師をし、今年度は、二カ所の高校で美術の講師をしている。講師生活はまだ半年しか経っていない。

私の作品のコンセプトは、どこにでもあるような風景を、誰もが見たことあるように描くことで、鑑賞者が作品と鑑賞者の思い出をリンクさせることだ。そうさせることで、日常の何気ない風景が、今までは違う風景として現れ、鑑賞者の心に何か大切なものとして刻まれることを願う。

私の初めての大作は、覚えていた限りで、幼稚園の時、友達と二人でB5ほどのわら半紙を何枚もつなげて海を冒険する絵だった。わら半紙は、先生が自由に使つかまわないということで教室に用意してくれていたものを使った。

たくさんさんの棒人間が、海で泳いだり、島で火をおこしたり、船に乗って冒険に出かける様子をひたすら描いた。教室の端から廊下に出るほど、用意されていたわら半紙を使い切った。そして、先生に叱られた。みんなで使うわら半紙を独占してしまったからだ。次の日から、わら半紙は先生に言わないともえなくなつた。

幼いころから親や兄が絵の描き方、折り紙の折り方、切り絵のつくり方を私に教えてくれた。私は特に絵を描くのが好きだった。私には物心ついたころから絵が身近にあった。

美術について

私が、小学五年生の時、「先生が本を読み聞かせるので、気になった場面を描きなさい」、という課題が出た。おそらく、先生には描いてほしい重要な場面がいくつかあったのだろう。私は、気に入った平凡な場面を描いた。完成したものを先生に見せたらひどく叱られた。先生に主人公が大活躍する場面について熱く語られ、とにかくその場面に描きなおせと言われた。私は、平凡な場面の良さを語ったが、口が下手だったのか、先生のお気に召さなかったのかわからないが、描きなおすことになった。適当に描いたらまた叱られた。

この体験は、美術の授業の話になると必ず思い出す。なぜ私が描いた場面がダメだったのか、未だに納得できないでいる。描きなおさなくてはならない明確な理由がほしかった。

授業中、生徒がつくる作品には、課題からそれた作品、テーマを無

視した作品等、さまざまな作品がある。それらの作品が、なぜ課題からそれていったのか話を聞くようにしている。課題を理解していなかったり、そもそも守る気がなかったという理由もあれば、課題を大きく解釈していたり、課題の

穴をついてきたり、思いもよらない理由を言う生徒もいる。前者であれば、課題をわかりやすく説明し直す。後者であれば、基本的にそのまま続けさせる。後者は、課題からはみ出しているの、当然、途中で不具合が生じることもある



「もういなくても、」
1,303×1,940mm, キャンパスに油彩, 2015年制作

が、できるだけ課題に沿わせるようにし、沿えなくなってしまう部分は、一緒に考えたり、生徒の判断に任せたりもする。授業中は生徒自身が納得できる形を取りたいと考えている。

美術の授業では、生徒が納得できることと、生徒が楽しめることを意識している。得意な生徒、不得意な生徒がそれぞれ考え感じた表現で作品をつくれるように心がける。上手い下手に囚われている生徒が多いが、重要なことはそれではなく、何を思っているのかで考える。それが技量不足で思い通りにいかないこともあるが、技法や技術は教えられるので、たいした問題ではない。しかし、表現したいことは教えられる。生徒それぞれが経験したことが表現、発想につながるの、そこを引き上げることができれば、生徒は楽しむことができる。この四カ月、高校で講師をしたことで、少しずつ生徒の様子が見えてきた。美術が好きで生徒、なんとなく美術を選んだ生徒、好きだけ描いたりつくったりが苦手な生徒。一人ひとりと作品を通してかわること、それぞれが持つ美術に対する気持ちも少しずつ感じてきた。学校生活の中で美術が占める割合はかなり少ない。生徒によつては0に等しい。しかし、それは授業の話であり、美術は日常にありふれている。美術の授業で美術の面白さに触れてもらうのは当然として、日常にありふれた

美術を、たくさんの生徒に感じてほしい。それを感じることができれば、日常はさらに楽しく、面白く、豊かなものになると思う。

日々、生徒に美術の面白さを伝えることを考える。伝えたいことが多く、何から話せばいいかわからない。また、情報が多くなってしまう、何をしているのかわからなくなることもある。それでも、美術で悩むことはなんだか楽しい。生徒が美術で喜ぶのも、困るのも見ていて面白い。講師生活半年でこれだけ面白いことに気づかされたので、まだまだ楽しむことがたくさんあるのだろう。



「もういなくても、」制作風景

さたけ まこと

高知県立中芸高等学校兼高知県立室戸高等学校 講師

アルテックの四十二年……

青山 清水



昭和四十八年（一九七三年）七月十七日、高知市北本町四丁目ヤングプラザビル二階にジャズ喫茶アルテックを開店、もう四十三年になります。

店名のアルテックは、アメリカの音響メーカーの名前で、開店にあたってこのメーカーの「アルテックA7」というスピーカーに決めていたので、当時の輸入元（株）エレクトロリの許可を得て命名しました。

そもそも、なぜジャズ喫茶を開いたのかと言うと、そのきっかけは昭和四十五年八月の台風十号でした。市内の大部分が浸水、当時農家だった妻の実家も被害を受け、畑だった現在地に、テナントビルを建築することとなりました。ところが、二階が埋まりません。直営で半分をエアライフル射撃場、もう半分を、私の提案でジャズ

ズ喫茶にすることにしました。

私は、当時オーディオとジャズの好きな公務員で、真空管アンプの自作、ジャズレコードの蒐集に興味としており、これを活かしたものでした。

開店してみると、今までにないタイプの店で目新しかったのか大変忙しく、当初は経理くらいは手伝うというつもりが、とうとう退職して本格的に取り組むことになりました。

最初のコンサートは、渡辺貞夫、カルテットで、昭和四十九年六月、当時の高知ホールで開催しました。

終了後、アルテックでメンバーが打ち上げ演奏をしたときに、貞夫さんから「この方が、いいじゃない」と言われ、そうか、ここで行けるんだと、気付かされました。

以来、菅野邦彦トリオや鈴木勲

クインテット、今田勝トリオ、中本マリ、金子晴美、マリーンらの女性ボーカルの入った大隅寿男トリオ他、その頃の日本を代表するジャズのグループが出演するようになりました。

コンサートは年間六〜七回のペースで続けてきました。その間、四国の他の店との連携もできて、メンバーと楽器、時には音響機材を持つてのコンサートツアーが始まりました。

前後して、東京のジャズプロモーター石塚氏との出会いがあり、バーニー・ケッセル(g)、アン・パルトン(vo)、アート・ペッツパー(as)、レイ・ブライアント(p)、ヘレン・メリル(vo)、ビル・エヴァンス(p)、クリス・コナー(vo)、カーメン・マクレエ(vo)など、外国のビック・ミュージシャン達のライブが、アルテックでも実現できるようになり



ジョン・ルイス（右）と



ビル・エヴァンス（右）と

ました。

レコードでしか聞いたことのないメンバーが訪れ、今振り返ると本当に熱い楽しい時代でした。

何よりも、自分たちが聴きたいジャズを皆さんに届けたいという思いが、強くありました。経営面では家族に迷惑をかけたが……。

徐々に、全国ツアーの仕事を手伝うことになっていったのです。

そして、秋のビックイベント、一九八八年第三回富士通コンコード・ジャズフェスティバルの高知公演、メル・トローメ(vo)、レイ・ブラウン(b)、J・J・ジョンソン(tp)を県民文化ホールで開催。以後、夜須町公民館、高知市文化プラザかるぽーとと、最終回の二〇一四年まで、毎年途切れることなく開催することができました。

また、アルテックも四十三年間、店側の都合で休むことは一日もなく続けて来ることができました。これもひとえに、家族、今まで勤務してくれたスタッフ、そしてお客様の力添えと感謝しております。

さて、ジャズ喫茶アルテックは

二〇一六年十月三十一日で閉店しますが、(株)アルテックは、音響サービスの会社として存続していきます。

その節目として、十月二十四日～二十六日には、アルテックファイナル・ジャズフェスティバルを開催、二十四日は伊藤大介(vo)、二十五日はブリーズ(Chor)、二十六日はキャロル・ウエルスマン(vo)&ピエール・コテ(g)の出演が決まっています。

前日の出演者が、翌日ゲストとして加わるという楽しい企画です。ぜひご来場ください。

十二月六日、十三日、二十日には、高知市文化振興事業団の市民講座で、「レコードとジャズの歴史」をお話する予定です。

今までコレクションしていたレコードをかけながら話をするという機会を得ました。こちらもどうぞご参加ください。

さらに現在、「国際的な音楽交流を中心に高知を楽しくするプロジェクト」の代表を務めています。ジャズ以外の音楽にも力を入れて参りますので、今後とも皆様のお力添えをお願いします。



ヘレン・メルリル (左) と妻 (青山幸枝)



ミルト・ジャクソン (左) と



ニューヨークの秋吉敏子邸にて

右から、筆者、青山幸枝、石塚孝夫、ルー・タバキン、秋吉敏子、フランク・ウェスとその妻

あおやま きよみ

一九四七年一月五日、南国市生まれ
追手前高校卒業。高知短期大学
在学中、公務員となり、その後
喫茶アルテック店主となる。

「高知市民の大学」

八十期（四十周年）を迎えて

鈴木 堯士

高知県下での生涯教育のパイオニアである「高知市民の大学」（以下「大学」）は今年（平成二十八年）十月で四十周年を迎える。ここま

で順調に継続できたのは高知市文化振興事業団と受講生の皆さまのご理解があったことが大きい。「大学」は運営委員会と高知市文化振興事業団事務局とが共同で企画・運営している。事務局は会計、講師との連絡調整、講義用プリントの印刷、講義日の進行、アンケート調査などで「大学」を陰で支えてくれている。

「大学」は昭和五十二年に創設され、市民に向けた大学教育の開

放の先駆けで、現在もなお続いてい

るのはごくわずかな都市だけに なってしまった。

創設当時は本町の県民文化ホールに併設された高知市立中央公民館講義室で開講されていたが、平成十四年四月から高知市文化プラザかるぼーと内に移行した中央公民館での開講となっている。

日程・講師は「大学」の運営委員会

で決める。運営委員長は初代が東元善次郎氏（元県教組文化部長・昭和五十二〜六三年）、二代は池川順子氏（元高知女子大学長・平成元〜九年）、三代は中内光昭氏（元高知大学長・平成九〜

十九年）、四代が私（鈴木・平成二十年から現在まで）で、初期の段階では東元氏を中心に運営委員の西沢弘順氏・関田英里氏（共に元高知大学長）岩田裕氏（高知大名誉教授）と私に加わり、活発な議論を戦わしたことが強く記憶に残っている。

運営委員会ではメインテーマと担当する講師を決めることが主な任務であるが、かつては二時間近く議論を重ねても結論が出ない場合も多く、前中央公民館に隣接する「三翠園」の中庭に会場を移し、ビールを飲みながら運営委員会を続行したこともしばしばあった。

「大学」は四月と十月に開講し、火曜日コースと金曜日コースがあり、それぞれのコースは十五回ずつ開催している（十八時半〜二十時）。

開講当初は「教養科」と「社会科学」でスタートし、昭和五十七年十一期から「理数科」と「社会科学」に変更。昭和六十年十七期から「自然科学科」と「社会科学科」のコースで開講していた。しかし、社会的な関心も多様化し、従来のコースの枠に収まらないコースを希望する声を受講生の間でも高く



かるぼーと11階大講義室での講義風景

なってきた。そこで平成十二年頃より多分野を組み込んだ「総合コース」が全体のコースの半分近くを占めるようになってきた。

「大学」で受講生が百名を超えたのは過去十五回もあり、定員百六十人のかるぼと十一階大講義室が受講生であふれ、あわてて補助椅子を持ち込んだこともあった。最近ではメインテーマが『人の生と死』（四十六期・総合）、『生活の中のIT革命』（四十九期・総合）、『こころ』（六十期・総合）、『マネジメントをやさしく学ぶ』（六十期・総合）、『宇宙のしくみと天体』（六十五期・自然）などが特に好評であった。

受講生からの希望もあって、コースの中で時には一日を使って野外に出掛けたこともあった。平成十五年の『環境問題―今、日本は何をすべきか』（五十三期・総合）では高知市清掃工場の見学、平成二十三年の『最近注目されている高知の地質』（七十期・自然）では室戸岬が世界ジオパークに認定されたこともあって貸切バスで受講生と共に室戸を訪れた。

平成二十六年の『地球を知り未



室戸世界ジオパーク巡検（51名の受講生が参加）

来をさぐる』（七十五期・自然）では高知大農学部のある敷地内にある海洋研究開発機構高知コア研究所・高知大海洋コア研究センターを訪れ、南海トラフの掘削コアなどを見学した。

「大学」で毎回苦勞するのは講師依頼である。年間十五名×四回＝六十名の講師に講義をお願いしている。最近、一名は東京・名古屋・京都など県外から最前線の研究をしておられる方を講師として招聘している。

「大学」では各コースであらかじめ講師の方に講義内容を二百字

程度にまとめていただき、これに講師の略歴や著書名などを加えたレジュメ集を作り、受講生に毎回手渡している。これを「大学ノート」と名付け、講義内容をメモできるとようなスペースも設けており、受講生には好評である。

「大学」の現在の運営委員会は、各分野の専門家である高知大、高知工科大、高知県立大（高知短大）、高知新聞社などの関係者十二名の委員で構成され、次回からのメインテーマ・講師などを議論し、決めている。

「大学」の創設四十周年の記念すべき八十期金曜コースは、メインテーマを「『市民の大学』が語る高知の過去・現在・未来」とし、これまで携わって来られた各運営委員にご自分の専門と結び付けながら、高知の過去・現在さらには未来について語っていただく講座に決まった。

今後ともテーマごとにより深く追求し、分かり易くしかもアカデミックな内容で、一段と充実した内容の企画になるよう努めていくつもりである。多くの市民の方々のご参加をお待ち申し上げている。

第80期高知市民の大学

火曜日総合コース「COP21・COP22と地球温暖化」
金曜日総合コース「『市民の大学』が語る高知の過去・現在・未来」

各コースとも、講義時間は18時半～20時、かるぼと11階大講義室で。

【受講料】

1コース 2,800円（テキスト代500円を含む）。
2コース 一括 4,800円（テキスト代1,000円を含む）。
500円で1日だけの受講も可能（当日受け付け）。

詳しくは、市文化振興事業団 TEL:883-5071 へ

すずき たかし

一九三三年 広島市生まれ
高知大学名誉教授。専門は地球科学（特に地質学・岩石学）。高知県文化財保護審議会副委員長、高知市民の大学運営委員長。『四国はどのようにしてできたか』、『寺田寅彦の地球観』、『最新・高知の地質 大地が動く物語』、など著書多数。

ピノキオさんが生まれた国で(第五回) 夏休み、母の宿題

並河 咲耶

真夏の三重県より、残暑お見舞い申し上げます。今回は、なんと日本は三重県いなべ市という、名古屋から一時間半あまり西方に車を走らせた、三重県でも北勢地域よりお届けしています。私達家族が現在滞在しているのは、いなべ市藤原町という藤原岳の麓の田舎町で、玄関を出ると、山と水田と農道を走る軽トラツクの往復くらいしか目に入ってきません。なぜこんなところに滞在しているかと言いますと、父方の祖母が住んでいた家のこれからを考えようと、叔父、父、私、ダリオで集まっているからです。築百年以上らしき家はさすが、風格があります。どうやら曾お爺さんの代には玄関の上の現代風に言うところのロフトのような空間で、蚕を飼っていたこともあったということも今回の滞在中に初めて耳にして、私の知らない

秘密がたくさん隠されているようです。ただ、様々なところに傷みもあり、これからどうやってこの家、そしてひいては、家族や二つの国と付き合っていくのか、考えるべきときが訪れています。

イタリアでは築百年なんて、大したことはないのですが、日本の首都圏で成長した幼少期の私にとっては、こう大きくて、古い家というのは、ピーターパンが探し求めるものが凝縮された、まるで夢のような空間でした。夏休みの度に遊びに行った、長野県の方の実家では、壁の漆喰がぼろぼろ剥がれてきたり、そこら中にある障子やふすまの和紙に穴があったり、畳の上をどんどん駆け回ったり、何枚も布団を並べて川の字どころか十三の字? になって従兄弟と寝たり、ご近所さんからきゅ

うりやトマトや桃やとうもろこしやらが届いたり、おじさん夫婦が大きなお風呂(日帰り温泉)に連れていってくれたり…。どんなに印象的だったことも、素晴らしきと感じたことも、かたづけしから忘れていく私に、こんなにも鮮明に記憶が蘇ってくるということは、やはり特別な場所だったのでしょう。普段のマンションや手狭な一軒家での生活から比べると、異世界としか思えない暮らしがある場所、それが私にとって大好きな「おばあちゃん」の家でした。

そしてそのおばあちゃんの家で出会う、おじさんもおばさんも、なぜか私達姉妹を本当に家族のように可愛がってくれたのでした。

この二〇一六年の夏、短い期間とはいえ、娘と姪っ子は、叔父と父に囲まれながら、まるでデジャブのように、そんな体験をしています。父でも母でもない大人が愛情を持って接してくれること、これも今、自分自身が母になったからこそ、その素晴らしさがよく分かります。そして、そういった家族の在り方は、日本だけでなく、イタリアでも同様に都市部、そして並行するように、過疎化が進む

地域では難しくなっています。

こうして自身の幼少期の想い出を振り返りながら、娘の成育にどうやって自分が一助となりうるのか、どのような環境に彼女を置くことが、彼女にとって最良なのか、考えることも増えてきました。いつぱしの人となっている四歳児に対して、私自身がこれをしろ、あれをしろ、と言うことは出来るだけ避けたいと思うも、様々な体験はしてほしいという親ならではの欲が出かねません。その一つに、「教育」があります。

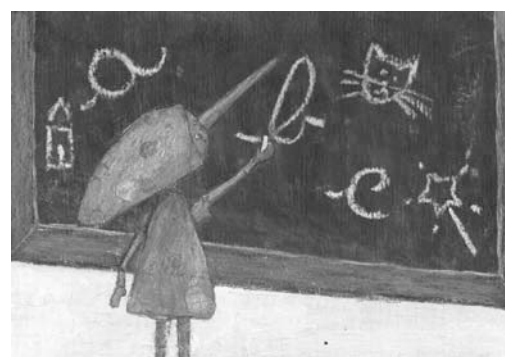
日本では、娘は「イタリア語、日本語が出来るバイリンガルにな



© Michela Grasselli
<http://lequattromani.tumblr.com/chisiamo>

るわね！それに英語、もしかしたらフランス語も出来るようになるのね」と声をかけられることが多いです。反してイタリアでは、「『母』国語と言うくらいだから（伊語ではmadre lingua（直訳：母の言葉））、ちゃんと日本語も習得出来るようにお母さんが頑張らなくちゃダメよ」と言われます。似て非なるこの二つの反応に日本とイタリアの相違が表れているように感じます。

日本では「言葉が出来る」ということが重視され、読み書きが出来る子どもは大人は非常にたくさんいます。しかし、私達は真に相手の国の文化まで理解しようとしているのでしょうか？全てを理解することは、無理だとしても、相手を尊重し理解しようとする姿勢を持ち、自らも自国の文化を代表する者として、迎合しすぎず、対等に相手と渡り合うことができていますでしょうか？時に、この国を代表する立場にあるべき人々を見てみると、英語でスピーチを用意したとしても、その心が欠けているようにしか見えないのは私だけなのでしょうか。しかし一方で、習い事などの幼児教育はイタリア



© Michela Grasselli

にはない、非常に優れた機会だと感じます。この夏は、ピアノの三回レッスン、公〇式の夏の特別学習、地元のスイミングスクールでの五日間の初級講座に加えて、ロボット組み立ての教室や白衣とゴグルまでつけて行うサイエンス教室まで、色々と体験してもらいました。中でも娘が「またおくるりのお勉強に行きたいの！」と言うほど好評だったサイエンス教室では、知識の詰め込みではなく、細かな観察力や「なぜ？」と思う心を刺激するもので、語弊を恐れずに言えば、一番「日本らしくない」、イタリアの幼稚園のプログラムに近く感じられる講座でした。

一方のイタリア（特に私達が住む北部）では、フランス語やドイツ語などのお隣の国の言葉というのは、改めて勉強するよりも、耳で覚えてしまう場合も少なくありません。ですの、どんな言語でもいいから習得させよ、というよりも、きちんと自分の出自を理解し、アイデンティティを確立するためのツールとして、母の国の文化をきちんと娘に継承せよ、それこそが言語を習得させる意味である、という意志が表れているように思います。その精神をイタリア人（ヨーロッパの人達は皆そうかもしれませんが、私自身の経験から、ここではイタリア人として）に感じるの、どんな街でも小さな村でも、十中八九、誰もが自分の街や家族の歴史を自慢げに話すときです。イタリアでは、物語（story）も、歴史（history）も storia という一語で表される通り、まるでその時代に生きていたかのように、活き活きと物語ってくれるのです。そして、私はそのときにいつも、自らの無知を恥じます。その場凌ぎの知識だけではなく、私はどれだけ自分の国のことを知っているのか？自分が育った場所

について語れるのか？

この夏は、そんな自分探しの旅を私自身がしているのかもしれない。そして、こうした問いへの答えを私自身が導き出すことが出来れば、娘の日本・イタリア両国との付き合い方にも道筋が見えてくるのかもしれない、そんな思いを抱きながら、まだまだ夏の巡業は続きます。

なみかわ さや

日本で生まれ、高校・大学とアメリカで異文化の洗礼を受けた後、帰国するも、現在はイタリア在住。合同会社 konjac 代表として、舞台や文化に関わる翻訳・通訳業務、日本へのイタリアのアーティスト招聘事業を行う。イタリアでは、ダリオ・モレッティ氏の主宰するテアトロ・インプロヴィーズでピアノ・打楽器演奏、経理を務める。一児の母。ご意見・ご質問等、お待ちしております！

konjacinternational@gmail.com
www.teatroallimprovviso.it

「演出家だらけの青木さん家の奥さん」特別インタビュー!!

「青木さん家の奥さん」という演劇作品をご存知だろうか。

一九九〇年の初演以来、多くの演劇人により再演を重ねてきた名作であり、その筋では「即興演劇の極み」と評されている。

舞台美術はビールケースのみ。

照明は地明かりのみ。音響は生ギターのみ。脚本は最低限の設定のみ。そこにあるのは俳優の肉体のみ。劇のほぼ全てをアドリブで駆け抜け、たくさんの笑いと感動を届けてきた衝撃的な作品である。

そして来る二〇一六年十月、現代演劇界の第一線で活躍する演出家を集め、あるうことか舞台に立たせるといふ、前代未聞・再演不可能な作品「演出家だらけの青木さん家の奥さん」が上演される。高知市を皮切りに豊中市、北九州市で、さらに二〇一七年三月には上田市、魚沼市と、全国五つの都市を回る旅公演である。

今回、原作者であり、「演出家だらけの青木さん家の奥さん」の舞台にも立つ、南河内万歳一座座長の内藤裕敬氏にお話を伺うことができた。十月の高知公演の前に、「青木さん家の奥さん」の魅力に

迫りたい。

—まず「青木さん家の奥さん」という作品について、初演以来どこかで再演され続けている作品だとお聞きしています。

内藤（以下N）：二十六年間、ほとんど途絶えずに再演されてるんじゃないかな。「キャッツ」を越えるロングランじゃないか?（笑）。

ある意味上演しやすい作品なんだろうと思う。舞台美術は地元の酒屋にビールケースを借りればいいし、俳優もそんなに多くないし、何より稽古が少なくいい。即興演劇ということで、段取りになつてしまふと面白くないから、「稽古」はしないということですね。

—過去の公演の映像を見たことがあります。即興劇を見るのは初めてでしたが、何度も大笑いしてしまいました。

N：役者自身が、その場面場面でひねり出した言葉によって芝居が進むから、舞台上で本気で困ったり本気で笑ったりする。お客さん



積み上げられた無数のビールケースが存在感を放つ舞台「青木さん家の奥さん」

にもそれが伝わるんだな。

—「青木さん家の奥さん」の脚本が出版されています。前書きがとても印象的ですが、その中にこの作品はでつちあげで創られた経緯があると書かれていますね。

N：まあ、でつちあげだね（笑）。だから、最初から即興演劇をやろうだとか目指していた訳ではないし、結果として再演が続く作品になった。そんなもんなんだよ。ルールさえしっかりしていれば、配役とかも変えちゃっていいし。

—原作は男性キャストだけですが、女性だけで上演されたこともありですね。

N：地元の俳優を特別出演させることもできるし、その点公共ホール向きだとも思うね。

—地元特別出演といえば、平成二十七年島根県雲南市での公演では、メインのキャスト六名に加え、十二名もの地元出演者があり、総勢十八名での上演でした。こゝまで大幅に出演者の数を変えられるのは、本作品の特徴だと思います。

N：もちろん地元の出演者がでること、集客につながりやすいということはある。

でもそれだけじゃなくて、出そうと思えば誰でも出てもらえる舞台だから、「市民と一緒に舞台を創る」だったり「市民に舞台経験を」といった、地域やホールの要望に応える芝居創りができる。

その地域独自の「青木さん家の奥さん」ができるわけだから、これも魅力の一つだろうね。

—今回の「演出家だらけの青木さん家の奥さん」のツアーでも、各地の地元出演者が舞台上に上がりまゝす。演劇人だけでなく舞台経験の無い人もいらつしやいます。

地元出演者の配役はどういったものになるのでしょうか。

N：まだ決まってるじゃないよ。一緒に創りながら決めていくかな。でも、単なる賑やかしということにはさせません。舞台に出るからにはちゃんとやってもらいますよ。

「内藤さんは舞台上でのまとめ役になると思いますが、どんなことを考えながら、初心者の方も含めて動かしていくのでしょうか。」

N：「ダレないようにすること。即興だけど、ルールはある。どこでこのやり取りを終わらせて次の「遊び」に移るのか、その判断を舞台上でしなきゃいけない。出演しながら、同時に演出つけているようなものだ。」

「きちんと舞台をコントロールしないと、グダグダになる。そうすると、俳優もお客さんもダレる。最後まできっちりまとめて、きっちり終わらせないといけない。大事なのは、お客さんに楽しんでもらうことだから。」

「これは誰にでもできることじゃないんだよね。だから今のところ再演するときは俺がいなきゃいけない。誰かできるやついいねえかな（笑）。」

「内藤さんがダレないのが一番ですね。でも、以前きちんと終わらなかったこともあるとお聞きしています。」

N：「モノマネ合戦みたいになったときは、グダグダになってしまったこともあるね。その時はお客さんが飽きてるのがわかったから「はい、おしまい！」って終わらせた」

「ことがある（笑）。」

「逆に、俳優もお客さんも楽しくて、ずーっと笑いが絶えない回があつて、その時はみんなノっちゃつてたから休憩なしで三時間やつたね。最後はもういい加減にしなきゃってなるくらい。」

「今回のツアーでも、そういった想定外のことが起きるかもしれないね。正直、どんな舞台になるのか読めません。」

N：「演出家だらけ」だからな。

「共演する演出家は、劇団太陽族の岩崎正裕さん、東京デスロックの多田淳之介さん、田上バルの田上豊さんで、一般財団法人地域創造の事業のつながりでこの企画が立ち上がりました。」

N：「岩崎は大学の後輩だし、みんな地域創造の登録アーティストなので、それぞれ酒を飲むことはあったね。でも一緒に作品を創ったことはないから楽しみなね。」

「ただ、台本や映像を、事前に演出家の皆さんに渡さなくてよい、というお話でしたな。」

N：「いいよ渡さなくて。そのほうが面白いから。」

「普段まったく舞台に立っていない皆さんですが（笑）。」

N：「高知の初日はとんでもないことが起きるかもな（笑）。」



舞台上で出演と同時に演出をこなす内藤裕敬氏。今回のツアーでは、いったいどんな舞台を創り出すのだろうか

「今回のツアーで回る地域について、印象をお聞かせください。」

N：「高知と北九州と上田は一緒に舞台を作ったこともあるし、また行けるのは嬉しいね。地域の演劇人の皆に会うのも楽しみです。」

「豊中は地元出演者をオーディションで選んだけど、何となく動かし方が見えてきているところかな。それぞれの特技を活かして地域色をだそうかと。」

「魚沼は行ったことがないんだよ。地元出演者もまだどんな人が来るのかわからないし、そういう意味では一番楽しみなだ。」

「でも、どこもやってみなきゃわからない。即興やからな。もちろん、良い舞台にしますよ。」

「以前の打ち合わせの時、ツアー中、時間をとって出演者が街歩きをするかも知れないと聞きました。」

N：「ご当地ネタも入れていきたいからね。折角の旅公演だしな。舞台設定も酒屋だから、地酒を出すこともある。高知の酒の銘柄はどうしようか？」

「おいしいお酒ばかりだから迷いますね！」

N：「高知で行きたい飲み屋があるんだよね。」

「各地でおいしいものを食べたり飲んだりするのも、旅公演の醍醐味ですね。」

N：「あとは釣り。でも冬の日本海は釣れないからなあ……。」

「結局聞き役力不足で、グダグダと世間話に突入してしまったのでこまめとさせていたのだ。」

「本番は内藤氏の手腕により、ダレることなく、最後まで楽しい舞台となるに違いない。」

「もう二度と観ることができない舞台「演出家だらけの青木さん家の奥さん」に是非ご来場ください（詳細はp15をご覧ください）。乞うご期待！」

7月～8月の事業から

「キッズフリーマーケット2016」

に参加して

七月三日、かるぼーとの「キッズフリーマーケット」に、学校の友達と弟との五人でお店を出しました。

受付に着くと、ずらりと人が荷物を持ってならんでいました。それを見て、「たくさん来ているなあ」とおどろきました。

会場でわり当てられたスペースは、品物をならべると三人しかすわれなかったので、交代で買い物や店番をしました。店番をしていると、品物がどんどん売れました。一週間くらい前からおもちゃをきれいにしたり、ねだんをつけたりしながら、売れるかなあ、どうかなあ、と心配だったので、売れてうれしかったです。

小さな男の子が、弟の使っていた変身ベルトを二百円で買ってくれた時は、「よし、もっと売るぞー」と、わくわくしてきました。

今年は、大事なぬいぐるみを売りに出さないとっておいだけれど、喜んで使ってくれる人がいるなら、出してもいいなと思いました。来年もまた、参加したいです。

（初月小学校四年生 松本夏海）



高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間 3,000円（4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで）

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

第六十六回高知市夏季大学

七月二十五日（月）から八月五日（金）までの土日を除く十日間、かるぽーと大ホールで「第六十六回高知市夏季大学」を開催し、『東日本大震災から五年、昭和南



海地震から七十年』『地方創生・高知の元気』などいくつかの大きなテーマのもと、十組十一名の講師の方々をお招きしました。

各界の第一線で活躍する講師を目の前で見られること、これが夏季大学の一番の醍醐味です。講師の細かな表情や声のトーン、会場の雰囲気など、活字やテレビでは味わえない臨場感があります。講演内容も多彩で、日々の生活の指針となるようなお話や、知的刺激に満ちたお話など、充実した十日間となりました。

また、昨年から導入した高校生・大学生限定の「トライアル聴講・特別受講票」は今年も好評で、十代で起業し社長として活躍を続ける椎木里佳さんや、ラグビー男子日本代表のメンタルコーチを務めた荒木香織さんらの講演では特に多くの学生の姿が見られました。

◆第六十六回高知市夏季大学講師／武田真一、中園ミホ、池田清彦、安田菜津紀、小川理子、笹野高史、磯田道史、椎木隆太、椎木里佳、小熊英二、荒木香織（開催日順）
（受講者数・五千二百七十三名）

高知市文化振興事業団 出版物のご案内



清流を子らへ ―21世紀に残したい鏡川―

高知河川環境研究会 編

― 僕の一番大切な自然、それは鏡川。これからも、ずっと大切にしていきたいな。

（高知市広報「あかるいまち」7 July 1990-No.445 より）

「川は生命の源流」。鏡川に再び清流を取り戻し、次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。（平成八年刊）

価格 1,080 円（本体価格 1,000 円＋消費税）

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち

高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071 へ

「この国」という言葉



風俗歳時記

最近、気になる言葉がある。

「この国の…」という言い方である。

「日本」と言っかわりに、「この国」と言っ

国会中継でもよく聞かし、新聞、雑誌、

ネット上でも毎日のように見かける。

この十年ほどの間に、急速に広がって

きた言葉だ。

起源は、おそらく司馬遼太郎の随筆集

『この国のかたち』だろう。この本が出

るまでは、あまり聞かれなかった。(こ

の本が出てからも、しばらくは広がらな

かった言葉だ。)

この言葉が安易に使われ始めたことに

違和感を覚える。

「この国のかたち」というタイトルは、



秀逸である。独特の余韻をおびた表現だ。

「日本のかたち」ではないけない。何か

が欠けてしまう。「イギリスのかたち」

や「フランスのかたち」と同列の存在と

して日本が語られることになる。話者の

日本人としての「当事者意識」が消えて

しまうのだ。日本に寄せる司馬遼太郎の

熱い思いが伝わらない。「日本」という

言い方では、話者からの距離が遠すぎる。

では、「わが国のかたち」ならどうだ

ろう。これでは、近過ぎる。語り手が日

本と一体化してしまい、冷静な批判がで

きなくなる。

「この国」という言葉は、映画のタイ

トルを借りて言うなら、「冷静と情熱の

間」にある。

高知を撮る

第32回写真コンテスト入賞作品

僕らの村の大文字焼

(平成22年9月四万十町川奥)

久保田征子

川奥花取り踊りの様子です。氏神様を祀ってある山頂で松明のもと奉納が行われます。後継者と材料不足のためほこらをふもとの方に移動されることになり、土地のお年寄りの方の「まるで大文字焼みたい」と称された山頂での行事は本年が最後となりました。

日本を愛するがゆえに、逆にこれをつき離して、冷徹に批判しようとする。だが、どんなに批判しても傍観者にはならない。

理性と愛。相反する二つのものが絶妙に溶け合っているのが「この国のかたち」というタイトルだ。

この微妙な言葉を、他国を排斥したり、独善的なナショナリズムを煽るスローガンとして使ってほしくない。

テロの脅威が世界に広がり、「テロとの戦争」がとめどなく拡大しつつある今、「この国」という言葉にこめられた「理性の声」にこそ耳を傾けるべきではないだろうか。

(本の虫)

演出家だらけの 青木さん家の奥さん 作・演出 内藤裕敬 高知 Ver.

「ありのまま」の言葉が疾風怒濤と乱れ飛び、劇の大半をアドリブで走り抜けていく——。「即興演劇の極み」として、多くの演劇人によって上演を重ねた名作「青木さん家の奥さん」! 最低限の設定の上で繰り広げられる自由すぎる舞台上、今回は現代演劇界の第一線で活躍する演出家が集結!! さらに地元の演出家も加わり、決して再演することができない前代未聞の舞台は、果たしてどんな力オスとなるのか!? 乞うご期待!!

【日 時】2016年10月22日(土)、23日(日) 14:00 開演 (13:30 開場)
【会 場】高知市文化プラザかるぼーと 小ホール
【入 場 料】全席自由 通常価格 一般 3,000円 高校生以下 2,000円 (当日各 500円増)
会員価格 一般 2,700円 高校生以下 1,800円
【お問合せ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

主催：高知市文化振興事業団
企画・制作：公共ホール演劇ネットワーク実行委員会
助成：一般社団法人全国モーターボート競走施行者協議会、一般財団法人地域創造、公共ホール演劇ネットワーク事業
公共ホール演劇ネットワーク事業は、地方自治体が開催するモーターボート競走の収益金を活用して実施しています。

高知市立中央公民館事業

第180回市民映画会



1952年、ニューヨーク。高級百貨店でアルバイトをするテレーズは、クリスマスで賑わう売り場で、そのひとを見た。

鮮やかな金髪。艶めいた赤い唇。真っ白な肌。ゆったりした毛皮のコート。そのひととすぐにテレーズを見た。彼女の名はキャロル。このうえなく美しいそのひとにテレーズは憧れた……。

原作は、大人気作家パトリシア・ハイスミスの幻の小説。「タブー」の中の普遍の愛。最高の恋愛ドラマを是非ご覧ください。

■日時
2016年9月22日(木・祝)、23日(金) 10:45～

■上映作品(2作上映)
・「キャロル」
・「マリ－ゴールド・ホテルへ幸せの第二章～」

■会場
高知市文化プラザかるぼーと 大ホール

■料金
一般 前売り 1,300円(当日 1,500円)
割引 1,000円 (学生証・長寿手帳・障害者手帳などをお持ちの方)

■お問い合わせ
高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

二〇四五年問題

二〇四五年問題! これは日本人の一人に一人が七十五歳以上の「後期高齢者」になるという二〇二五年問題でもなく、日本の人口が一億人を割り込んでしまふという二〇五〇年問題でもない。実は、二〇四五年には機械やコンピュータが、人間のさまざまな能力や思考を超えてしまふという問題が起きているのである。

人間はまず馬力のある蒸気エンジンやガソリンエンジンなど、すでに力ではずいぶん前から、人間は飛ぶことも走ることも機械に敵わない。計算する能力でもコンピュータにすでに敵わなくなっている。思考することにおいても、プロ棋士と囲碁対局したコンピュータが勝ったというニュースを聞いたことがあるので、すでに人間を超

今号の表紙

「宝の地図」

高橋 紅葉

世界には自分の知らない、見たことない楽しいことや凄いことがたくさんあると思います。

だから世界地図は、私にとって宝の地図です。

(たかはし もみじ/
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)

え始めているように思える。ヘボ碁を打つ私などより、コンピュータは遙かに優れた思考回路を持っているのは確かだろう。

二〇四五年、つまりいまからわずか三十年後には力仕事はもちろんのこと、計算だけでなく出来事の記憶も考えることも、コンピュータに任せてしまふ時代がくるのだろうか。もちろんそれまでにまだ人間が住めるだけの地球であればの話だが。

先日、過去世のことを覚えていて、その記憶に悩まされているという女性にあった。記憶がたまたま残ったということもあり得るだろうと私は思うが、忘れることのできない苦しみは尋常ではないのだろうかとも思う。

最近忘れものばかりする私というのも気が引けるが、想像するに、二〇四五年に人間に残された唯一の能力は、忘れることだけになっているかも知れない。

(霖)

公益財団法人高知市文化振興事業団 主催事業のご案内

文化高知 No.193
2016年(平成28年) 9月1日発行

公益財団法人 高知市文化振興事業団

Takeshi Sato

ローラーアートの世界…
2016 in Kochi

2016年 9月17日(土) ▶ 19日(月)

高知市文化プラザかるぼーと 10:00~18:00
7階市民ギャラリー第3展示室 (高知市九反田2-1)

【入場料】 前売り/500円 当日/600円 ※高校生以下入場無料

<http://www.kfca.jp>

e-mail kikaku@kfca.jp

〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071 郵便振替0168015114869